

徳島県旧貞光町端山の方言アクセント

村 田 真 実

On the Pitch Accent in the Dialect of Habayama-Sadamitsu, Tokushima Prefecture¹

Mami Murata²

Abstract

The purpose of this paper is to report on the results of research I did in the summer of 2011 on accents patterns and sounds in the dialect of Habayama-Sadamitsu in Tokushima prefecture. There are two types of accents in Sadamitsu. One is Sanuki style-accent, which is used in the plain area of Sadamitsu town, and the other is a variant of Sanuki-style known as Yamashiro-style. This time, I feature on the latter one. Analyzing the accents in Habayama-Sadamitsu is an important chance to understand the Yamashiro-style accent, which is distributed around Tokushima prefecture like stepping stones.

¹ 岸江信介教授の査読による。

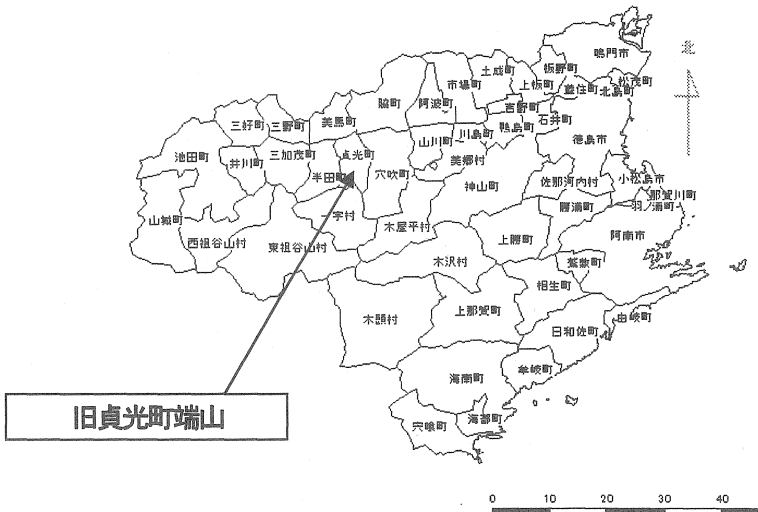
² 徳島大学大学院総合科学教育部博士後期課程院生

Doctoral Course, Graduate School of Integrated Arts and Sciences, The University of Tokushima.

1. はじめに

本稿は、徳島県旧貞光町端山（以下、説明の便宜上、「旧」表示を省き、市町村合併前の名称を用いる。他の地名も同様）のアクセント体系と音調について記述を行い、それを報告することを目的とする。森（1958）によると、貞光町端山は讃岐式アクセントの変種が聞かれる地域として報告されている。また、同種のアクセントが聞かれる地域として、半田町八千代、一宇村、山城町などが挙げられる。

貞光町とは、現在のつるぎ町字貞光にあたる。吉野川中流域の南岸に存在し、西に半田町、東に穴吹町、南に一宇村と隣接し、吉野川を挟んで美馬町と向かい合っている（図1参照）。貞光町北部は平地、南部は山地となっており、前者は貞光町貞光、後者は貞光町端山というように区別される。本稿では後者の貞光町端山を調査対象地域とする。貞光町貞光では讃岐式アクセントが聞かれるが、貞光町の大部分を占める貞光町端山ではその変種が聞かれる（村田・2010 他）。これは先行研究でも明らかになっているところであり、貞光町貞光と貞光町端山のアクセントが異なることは森（1958）、石田・岸江（2001）でも言及されている（詳細後述）。しかし、これまで当該地域だけを特に取り上げて報告したものはない。本稿では、今まで追究されなかった当該地域のアクセント体系とその音調について、詳細を報告したい。



<図1：市町村合併前の地図による、旧貞光町端山の位置>

まず、徳島県下のアクセント体系について、その概要をおさえておきたい。徳島県下のアクセントの詳細は表1のようになっている(生田・1951、山名・1956、森・1958、上野・1987、上野他・1991、上野編・1997)。表1の通り、定説では貞光町端山のアクセントは山城谷式であるとされる。山城谷式アクセントがどのようなものかを確認しておく、二拍名詞の統合状況にその特徴があり、統合数は3で、(1・3・5/2/4)となっている。分布地域は徳島県西部の山間部にある、一宇村・貞光町・半田町、山城町である。また、同じ讃岐式アクセントの変種として、池田町出合の出合式アクセントというものも存在する。本稿では讃岐式アクセントの変種について記した先行研究にも触れつつ、貞光町端山のアクセントを明らかにしていきたい。

<表1：徳島県下のアクセント分布>

京阪式 (徳島型)		県東部
京阪式 変種	垂井式	三好市西祖谷山村・東祖谷山村 那賀町木頭村
讃岐式 (池田型)		県西部
讃岐式 変種	山城谷式	美馬郡つるぎ町一宇・貞光・半田 三好市山城町
	出合式	三好市池田町出合

本稿では表記上の煩雑さを避ける為、それぞれのアクセントを示す際に記号を用いた。Hを高拍、Lを低拍、Fを拍内下降、Rを拍内上昇として記述した。

2. 端山アクセントの位置

2. 1 森重幸 (1958)

徳島県下全域のアクセントを調べ、概観を述べたものとして最も古いものに、森 (1958) がある。これによると、貞光町端山は山城谷式アクセントの地域に分類されている。その中でも特に、貞光町端山では三音節 (原文ママ。本稿では三拍とする) の動詞第1類五段活用が HLL になる点において、讃岐式とも山城谷式とも異なるということが指摘されている。他の山城谷式アクセントが分布する地域 (山城町・一宇村など) では三拍動詞の統合状況は1 (1・2・3) で、音調はLHLとなっているが、貞光町端山の場合は統合状況が2 (1/2・3) で、音調は第1類がHLL、第2・3類がLHLとなっているというので

ある。この点が貞光町端山の特徴である。但し、「各々のアクセントの型がどのような性格をもって存在するかは、かなりデリケートである」と書かれている通り、徳島県山間部のアクセントは音調のゆれが激しい。

2. 2 上野善道 (1987)

上野 (1987) では讃岐系の下位変種として、第三次アクセントの3種類の内、山城谷式・出合式アクセントが紹介されている。その音調と分布地域が示されている。山城町の音調の特徴として二拍名詞の第1類と第3類、第5類の二拍目に下降があるとしている。また、分布地域は山城町・一字村・貞光町端山・半田町八千代が挙げられている。山城谷式・出合式のいずれも核の位置だけで説明出来る体系であり、東京式アクセントと同じであるという解釈がなされている。

ちなみに、山城谷式・出合式に接する徳島県の南部地域は二拍名詞の統合状況が3 (1・4/2・3/5) の垂井式であるとまとめられている。

2. 3 上野和昭・仙波光明・森重幸 (1991)

この報告は山城町に存する山城谷式アクセントについて、二拍名詞を中心とした調査を若年層に対して行い、その結果と年配層 (原文ママ) を比較して、その動向を探ったものである。

若年層のアクセントについて、特筆すべきは第5類で、伝統的な山城谷式アクセントであれば第5類は第1・3類と統合して同じような振る舞いを見せるはずであるが、上野他 (1991) の調査結果では名詞単独=●○³、助詞付=●○○となっている。

続いて年配層との比較であるが、変化が起きている部分として指摘されているのは、第2類、第4類、第5類についてである。高拍の位置が1拍目のものは2拍目に、2拍目のものは1拍目に動いている。これについて、上野他 (1991) は全ての変化をアクセントの自律変化として見ており、外的要因については考え難いものとしている。その上で、「年配層では音調の類似から第1・3・5類が統合と考えられていたが、この変化をみるに、やはり第1・3類と第5類とは統合にまでは進んでいなかったと判断される」と結論づけている。これは、二拍名詞の統合状況が3 (1・3・5/2/4) となっているのが山城谷式アクセントの特徴であるとされていたのを覆す結果であり、山城谷式アクセントを見ていく際に注目すべき点である。

³ 原文ママ。高拍を●、低拍を○、中高拍を◎で表している。以下同。

2. 4 石田祐子・岸江信介 (2001)

徳島県下全域のアクセントを調べ、概観を述べたものとして最も新しいものに、石田・岸江 (2001) がある。石田・岸江 (2001) では上野他 (1991) を受けて、第1・3・5類の統合について意見が述べられている。句頭では1・3・5類は合流しているものの、句中では対立があるというのである。また、この一字・山城谷式アクセントについては、垂井式アクセントの場合と同じように式の対立がなく、核の有無とその位置だけで弁別されるアクセントであると明示されている。

石田・岸江 (1991) の見る山城谷式アクセントは上野 (1987) と同じく体系的に東京式アクセントと同一であるという。つまり、垂井式、一字・山城谷式・出合式の3種について、語の所属が違うだけで、出現する型は同じであるというわけである。

以上で先行研究の概観を終える。

3. 調査の概要

3. 1 調査期間

2011年8月25日、9月14日に行った。

3. 2 調査地点

一度目の調査は、貞光町端山の中でも東部の山の上にある家賀道上という集落で行った。二度目の調査は、貞光町端山の中でも西部にある竹屋敷という集落で行った。

3. 3 調査対象

家賀道上で話者を務めて下さったのは、古城芳明氏 (ID: 1) と宮久貞広氏 (ID: 2) の2名である。古城氏は0-8歳の間徳島県徳島市蔵本で過ごされたが、言語形成期以降はずっと貞光町端山 (家賀道上) で過ごされている。お話を聞かせて頂くに、両親共に貞光町端山のご出身で、且つご本人も貞光町端山のアクセントの特徴を色濃く反映している点において、0-8歳までの経歴は無視して良いと判断し、アクセントのデータを利用させて頂いた。宮久氏は生まれも育ちも貞光町端山 (家賀道上) である。但し、諸事の都合上、宮久氏の調査は部分的にしか出来なかったことを注記しておく。

竹屋敷で話者を務めて下さったのは、藤本盛氏 (ID: 3) と松浦義人氏 (ID: 4) である。藤本氏は38歳以降に数年大阪で住まわれた経歴があるが、言語形成期からは外れているので問題ないと判断し、情報提供を賜った。松浦氏は生まれも育ちも貞光町端山である。

その他の情報については表2の通りである。

<表2：話者情報>

ID	生育地	生年	年齢	職業	父出身地	母出身地
1	蔵本、貞光町端山	1934	77	会社員、土木、農業	端山	端山
2	貞光町端山	1933	78	農業	端山	端山
3	貞光町端山、大阪	1934	77	建築	端山	端山
4	貞光町端山	1945	66	団体職員	端山	端山

3. 4 調査方法

読み上げ式の面接調査を行った。それぞれの単語を書いた紙を用意し、ICレコーダーのマイクに向かってそれを読み上げて頂いた。聞き取りは実際にその場で行い、後から録音を使って確認した。

3. 5 調査語

調査語彙は『早稲田語類』⁴から偏りのないよう選定した。

名詞については、それぞれの語に単語単独形、名詞+助詞「が」、「良い」+名詞、「良い」+名詞+助詞「が」+「好き」の項を設け、厳密に調査をした。本来なら低起無核語「良い」ではなく高起無核語「この」を語頭につけて式の対立を判断すべきであるし、そのような手法が主流であるが、当該地域の場合は予備調査の段階で「この」が有核化(HL)してしまうことが分かっていた為、「この」付きの句は空え、代わりに「良い」付きの句を用いた。

動詞・形容詞は、その単独形を調べた。動詞は活用形も調べたが、紙幅の都合上、今回は報告しない。

4. 貞光町端山のアクセント

4. 1 名詞のアクセント

まず、一拍名詞のアクセントについて述べる。一拍名詞の統合状況は2(1・2/3)で、その音調は第1・2類がH-L、第3類がL-Hである。長音化(「蚊が」なら「カーガ」となること。京阪式アクセントではしばしば聞かれる)は一度も起こらなかった。読み上げ

⁴ 坂本他編(1998)を指す。

式ゆえに長音化しなかったのかも知れないが、讃岐式アクセント或いはその変種については長音化が起り難いような印象を受ける。この辺りを面接調査時に質問すべきであったが、失念していたので、長音化が起らないことについては推測程度に留めざるを得ない。話者別に見てみると、ID: 1、ID: 2、ID: 3は第1・2類と第3類の音調の区別があった(第1・2類がH-L、第3類がL-H)が、ID: 4からはH-Lしか聞かれなかった。ID: 4には類の別がなかったようであるが、読み上げ式ゆえに一律に読んでしまった可能性もある。「良い+名詞」など句中にあっては、ID: 1は第1・2類=LL+H、第3類=HL+Lと読んだ。ID: 4からは全てについてLL+Hが聞かれた。「良い+名詞+助詞+好き」についても同様の結果であった。

次に、二拍名詞のアクセントについて述べる。第1類「竹、鳥、箱、端、水、鼻」については、話者によって個人内でも様々な音調が聞かれた。HH、HL、LH などである。上野(1987)の説に拠りながら考えてみるに、これは元々HHが存在したところに下降式音調の影響があり、有核化が起ってHLになったものと推測される。また、LHについてはHHを保持しようとしたものの、語頭低下が起って1拍目が低拍になった可能性がある。たとえばID: 4の場合、名詞単独ではHHが聞かれたが、助詞付きになるとLH-Lという音調が聞かれた。ID: 1のようにHHとHLしか出ない話者、ID: 3のようにHH、LHしか出ない話者もある。但し、助詞付きの場合はHH-HとLH-Lしか出なかった。HL-Lが聞かれてもおかしくないわけであるが、単語単独でHLと読んだ話者でも助詞付きになると、LH-L或いはHH-Lと読んだのである。第2類「歌、人、音、冬、雪、蝉、北、梨、夏」については、全員一致でHL、HL-Lとなった。第3類「花、犬、耳、山、亀、足、朝」は第1類と同じような様相を呈している。ID: 3からは安定してLHが聞かれたが、ID: 1からはHHが聞かれたりHLが聞かれたりした。HHをベースに、ゆれているのである。具体的には、「犬、耳、亀」=HH、「山、足」=HLが聞かれた。ID: 4からは「犬、耳、亀」=LH、「山、足」=HHが聞かれた。このように、音調は話者によって異なり、語による傾向というのは見いだせない。第4類「肩、空、松、息、針、箸、糸、海、跡、数」はLH、LL-Hで安定していた。第5類「声、窓、猿、井戸、蜘蛛、秋、鶴、鍋」についても、LH、LH-Lで安定していた。

本稿では、二拍名詞の統合状況は3(1・3・5/2/4)であると判断したい。第5類の振る舞いは第1・3類とは異なり、第1・3類のようにゆれずに、安定している。第1・3・5類の統合についての詳細は後述する。

更に、三拍名詞について述べる。第1類「魚、形、着物、鼻血、車」は二拍名詞と同じ

く、個人内で HHH⁵、LHL、HLL、LHH と様々な音調が聞かれた。これら HHH のバリエーションは、下降式による有核化、語頭低下で説明出来る。「魚、車」からは LHL が、「形、鼻血」からは HLL が、「着物」からは HHH、LHH がよく聞かれた。助詞がついた場合は、それぞれの語単独の音調の語末が高ければ高く、低ければ低く、すなおについた。「良い+名詞」の場合も、「魚、車」からは LHL が、「形、鼻血」からは HLL が、「着物」からは HHH、LHH がよく聞かれた。「良い+名詞」や文などで単語が句中にあらわれる場合も、名詞単独の場合の音調と同じものが聞かれた。第2類「二つ、二人、毛抜き、蛸蛸」についてもゆれが酷く、HHH、LHL、LHH、HLL などが聞かれた。ID:1 と ID:4 からは「毛抜き」=HLL、「二つ、二人、蛸蛸」=LHL が聞かれた。ID:3 からは「二つ、二人」=LHH、「毛抜き」=HLL、「蛸蛸」=LHL が聞かれた。但し、助詞がついた場合は、「二つ、二人、蛸蛸」の全てから LHL-L が聞かれた。「良い+名詞」で句中に名詞があらわれる場合も LHL が多く聞かれ、「毛抜き」が「良い毛抜き」=LLHL になる以外は「良い+名詞」=LHLHL になった。第3類「小麦、力、二十歳」、第4類「鏡、刀、女、袋、男、サザエ」は、HLL、HHL、LHL でゆれていた。第3類と第4類はゆれながらも統合しつつあり、元になっている讃岐式アクセントと同じ傾向にある。ID:1 の場合は「小麦、力、鏡、刀、男」=HHL、「二十歳、女、サザエ」=HLL、「袋」=HHH となり、LHL は聞かれなかったが、ID:3、ID:4 からは LHL が多く聞かれた。ID:3 の場合、第3類は HLL で安定していたが、第4類は LHL と HLL、LHH が入り混じって発音された。具体的には、LHL で発せられたのは「袋、男」で、HLL で発せられたのは「女、サザエ」、LHH で発せられたのは「鏡、刀」である。ID:4 も「二十歳、小麦」=HLL、「力、鏡、刀、袋」LHL、「女、男、サザエ」=HHL となっており、このように、第3・4類の音調は話者によって異なり、語による傾向というのは見いだせない。第5類「朝日、心、油、簾、柱」は LHL、LHH、HLL、HHL などが聞かれ、ゆれている。ID:1 からは「朝日、心」=HLL、「油、簾、柱」=LHL となって聞かれた。ID:3 からは、「朝日、簾」=HLL、「柱」=LHH、「心、油」=HHL が、ID:4 からは、「朝日」=HLL、「油、柱」=LHL、「簾」=LHH、「心」=HHL が聞かれた。第5類についても語によって音調が決まっているわけではなく、話者によってどのように発音するかはまちまちであり、傾向のようなものは見られない。第6類「兎、狐、雀、蛙、鼠」は LLH、LLL-H で安定していた。第7類「便り、後ろ、蚤、兜、鯨」は LHL、LHL-L で安定していた。

⁵ 本稿で表記する HH、HHH、HHHH……は上野(1987)の言うところの平進式を意味しない。HH……は音調として下降式の可能性もあり得る。但し、本稿では音響音学的な分析を行っていない為、特に区別をしない。

4. 2 動詞のアクセント

次に、動詞のアクセントについて見ていく。(表3参照)

<表3：動詞の類別・話者別音調一覧>

			ID: 1	ID: 2	ID: 3	ID: 4
二拍 動詞	第1類	五段 活用	—	—	—	—
		一段 活用	HL	HL	HL	HH、HL
	第2類	五段 活用	LH	LH	LH	LH
		一段 活用	LH	LH	LH	LH
三拍 動詞	第1類	五段 活用	HLL	HLL	HLL	HHH
		一段 活用	HLL	HLL	HLL	HHH
	第2類	五段 活用	LHL	HHH	HLL HHH	HLL HHH
		一段 活用	LHL	LHL	LHL	LHL
	第3類	五段 活用	LHL	LHL	LHL	LHL LLH
	四拍 動詞	第1類		LHLL	LHLL	LHLL
第2類			LHLL	LHLL	LHLL	HHHL
第3類			LHLL	LHLL	LHLL	HHHL

まず、二拍動詞について述べる。第1類一段活用「着る、する、寝る、似る、煮る、いる、行く」はHLと安定して発音される。但し、ID: 4からは安定してHHが聞かれた。ID: は60代であり、他の話者は70代であることから、60代くらいから下の世代になるとHHに変化しつつあるのかも知れないと推測出来るが、今回は60代の話者が1名しかいない為

に、この結果の違いの原因が個人差であるのか、世代差であるのか判断することは出来ない。LH>HHの変化は考えにくい為、これは恐らく個人差なのではないかと思われる。或いは、言語内的変化というよりも、外的変化（京阪式の影響）を受けたものではないかと考えられる。これについては三拍動詞のID:4の振る舞いにも同じことが言える。第二類「打つ、書く、読む、切る、住む、飲む、来る、出る、見る」は活用の別なくLHで安定して発音された。但し、「得る」だけは全ての話者からHLが聞かれ、この一語だけ異なる動きを見せていると言える。

次に、三拍動詞について述べる。三拍動詞については先行研究（森・1958）にもある通り、他の山城谷式アクセントとは異なる、貞光町端山のアクセント独自の体系があることに注意しつつ述べて行きたい。森（1958）では統合状況が2（1/2・3）で、音調は第1類がHLL、第2・3類がLHLとなっていた。今回の調査結果はどうであろうか。今回の調査結果でも、第1類五段活用「探す、歌う、並ぶ、囲む、使う、昇る」、一段活用「負ける、燃える、植える」はHLLと発音された。但し、ID:4だけはHHHと発音した。ID:4がHHHと発音した理由については上で推測した通りである。これも内的変化としては、HLL>HHHになるのは考え辛い。また、第2類五段活用「余る、思う、作る、泳ぐ、困る」、一段活用「起きる、逃げる、受ける、降りる、着せる、建てる」については、LHLという音調が聞かれた。第3類「歩く、入る（這入る）」についても同様である。つまり、先行研究から60年近く経った今でも、伝統的な貞光町端山のアクセント体系2（1/2・3）、第1類=HLL、第2・3類=LHLは保存されているということになる。

更に、四拍動詞「固まる、教える、助ける、別れる、破れる、抱える、支える」について述べる。どの話者も類に関係なく全ての語を同じ音調で読み上げた。ID:1~3はLHLL、ID:4はHHHLで読み上げたことから、話者の年齢などを加味して考えてみると、LHLLが貞光町端山の伝統的なアクセントであると考えられる。動詞や形容詞の四拍語については頭高型になりがちであるが、LHLLはHHLLの語頭が低下して定着したのと考えられる。讃岐式アクセント全般に言えることであるが、讃岐式アクセントとその変種の体系を持つ地域のアクセントは語頭が大変に不安定である。高くなったり低くなったりする。貞光町端山もそのような音調特性を備えた地域なのであろう。

4. 3 形容詞のアクセント

更に、形容詞のアクセントについて、類別音調の一覧を見てみよう（表4参照）。

〈表 4：形容詞の類別・話者別音調一覧〉

		ID: 1	ID: 2	ID: 3	ID: 4
二拍 形容詞	第一類	—	—	—	—
	第二類	LH	LH	LH	LH
三拍 形容詞	第一類	HLL	HLL	HLL	HLL
	第二類	LHL	LHL	LHL	LHL
四拍形容詞		HLLL	HLLL	HLLL	HHHL

形容詞については、読み上げ表を2回通り読み上げて頂いた。それぞれの単語について合計2回読み上げて頂いたことになるが、1度目と2度目で音調に違いがあるものはなかった。つまり形容詞のアクセントは安定していると言える。家賀道上と竹屋敷では特に有意な地域差は見られなかった。

二拍形容詞第2類については、「良い、無い、エー」のすべてについて LH が聞かれた。音調は LH で安定している。

三拍形容詞第1類「浅い、甘い、暗い、重い」については、HLL という音調が聞かれた。「厚い、薄い」のみ ID: 1 から LHL が聞かれたが、第1類の音調は HLL と判断しても良いだろう。それに対して、三拍形容詞第2類「白い、熱い、痛い、多い、黒い、近い、太い」は「多い」について ID: 1、ID: 2、ID: 3 から HLL が、ID: 4 から HHL が聞かれたこと以外は、音調は LHL で安定していた。つまり、三拍形容詞は音調による類の別があり、第1類は HLL、第2類は LHL となっている。これは伝統的な讃岐式アクセントの区別を保っている稀有なものであるといえる。香川県本土の讃岐式アクセントについて、現在、第1類と第2類の音調が混同されつつあることは福良・村田（2008）で指摘した通りである。玉井（1965）には「丸亀アクセントと高松アクセントだけが、第1類「赤い」類と第2類「白い」類の型の区別を保っている」とあり、「香川県下のアクセント一覧表（その1）」では丸亀市周辺では第一類が HLL、第二類が LHL となって類の区別があるが、善通寺市周辺ではどちらの類も HLL になることが報告されている。玉井（1965）の報告は香川県本土の讃岐式アクセントについてのものであり、その変種である山城谷式とそのまま比較することは出来ないが、玉井（1965）の報告から 50 年経った今、香川県本土では類の区別を失いつつあるにも関わらず、貞光町端山に保存されているこの類の区別は大変稀有な存在ではないだろうか。

四拍形容詞「いやしい、やさしい、あやしい、さびしい」については、ID: 1、ID: 2、ID:

3の話者から聞かれた HLLL が優勢である。ID:4からは HHHL という音調が聞かれた。四拍形容詞のアクセントは頭高型になるようであるが、その下降位置は比較的自由である。筆者はこれについて、世代差が関係している（高年層ほど下降位置が早く、年が小さくなるにつれて下降位置が遅れる）と考えているが、今回のデータからは世代差について判断することは出来ない。

以上で品詞ごとのアクセント体系・音調の状況の報告を終える。

5. 貞光町端山のアクセント体系—貞光町貞光・一字村との比較から—

本項では、貞光町端山の北に位置する貞光町貞光と、南に位置する一字村との比較から、貞光町端山のアクセント体系についてまとめた。

まずは、二拍名詞第1・3・5類が本当に統合しているか（同質のものなのか）について述べる。第5類は安定して LH、LH-L が聞かれるが、第1類と第3類は基本的に LH、LH-L が聞かれるものの、HH-H、LH-H、LH-L の間でゆれが生じている。話者（ID:1）から、「端山では読むたびにアクセントが変わる」とのご教示があり、それもこの第1・3類の音調が安定しない印象から生まれた感想であると推測出来る。これについては、元々讃岐式で HH-H だったものが下降式の影響を受けて有核化し、HH-L になったところに語頭低下が起き、LH-L 化したと考えるのが自然である。但し、これはアクセントの自律変化のみに目を向けた考え方である。これだけでは貞光町端山のアクセントは解き明かせない。何故第1・3類だけがゆれ、第5類は安定しているのか。その解答は貞光町貞光或いは一字村と比較してみることで初めて分かるかと筆者は考える。

貞光町端山は北に貞光町貞光、南に一字村と隣接している。このような地理関係にあることが、貞光町端山のアクセントの特徴を生み出した原因であると推測する。貞光町貞光は村田（2010a, 2010b）によると第1類は HH、HH-H で安定していたが、第3類は HH、HH-H の他に HL、HL-L が聞かれることがあった。第5類については LH、LH-L で安定している。また、仙波・村田（2011）によると、一字村のアクセントは、第1類、第3類、第5類全て同じで、LH、LH-L で安定していた。

従って、三地点の音調をまとめてみると次頁の表5のようになる。

表を見ると、貞光町端山は、貞光町貞光と一字村の両方が混じり合った性質を持つことが分かる。つまり、言語接触により、貞光町端山のアクセントはこうもゆれているのである。北と南に全く異なる音調の地域を持つという点から、貞光町端山のアクセントの現状が生まれたものと推測出来る。これで、第5類のアクセントだけが貞光町端山で安定している理由が明らかとなろう。影響を受けている2地点に音調の違いがないからである。

<表5：3地点の音調・名詞>

	貞光町貞光	貞光町端山	一字村
一拍第1類	H-L	H-L	H-L
一拍第2類	H-L	H-L	H-L
一拍第3類	L-H	H-L L-H	H-L L-H
二拍第1類	HH、HH-H	HH、HH-H HL、HL-L LH、LH-L	LH、LH-L
二拍第2類	HL、HL-L	HL、HL-L	HL、HL-L
二拍第3類	HH、HH-H HL、HL-L	HH、HH-H HL、HL-L LH、LH-L	LH、LH-L
二拍第4類	LH、LL-H	LH、LL-H	LH、LL-H
二拍第5類	LH、LH-L	LH、LH-L	LH、LH-L
三拍第1類	HHH、HHH-H LLH、LLL-H	HHH、HHH-H LHL、LHL-L HLL、HLL-L LHH、LHH-H	LHL、LHL-L LHH、LHH-H
三拍第2類	LHL、LHL-L LLH、LLL-H	HHH、HHH-H LHL、LHL-L HLL、HLL-L LHH、LHH-H	LHL、LHL-L LHH、LHH-H
三拍第3類	HLL、HLL-L	HLL、HLL-L HHL、HHL-L LHL、LHL-L	HLL、HLL-L
三拍第4類	HHH、HHH-H HHL、HHL-L	HLL、HLL-L HHL、HHL-L LHL、LHL-L	LHL、LHL-L
三拍第5類	HHH、HHH-H HLL、HLL-L	LHL、LHL-L LHH、LHH-H	LHL、LHL-L HLL、HLL-L

		HLL、HLL-L HHL、HHL-L	
三拍第6類	LLH、LLL-H	LLH、LLL-H	LLH、LLL-H
三拍第7類	LHL、LHL-L	LHL、LHL-L	LHL、LHL-L

<表6：3地点の音調・動詞>

			貞光町貞光	貞光町端山	一字村
二拍動詞	第1類	五段活用	HL	—	HL
		一段活用	HL	HL	HL
	第2類	五段活用	LH	LH	LH
		一段活用	LH	LH	LH
三拍動詞	第1類	五段活用	HHH	HLL	LHL
		一段活用	HHH	HLL	LHL
	第2類	五段活用	HHH	LHL HHH	LHL
		一段活用	LLH	LHL	LHL
	第3類	五段活用	LLH	LHL	LHL
四拍動詞	第1類		—	LHLL	—
	第2類		—	LHLL	—
	第3類		—	LHLL	—

<表7：3地点の音調・形容詞>

		貞光町貞光	貞光町端山	一字村
二拍形容詞	第一類	HL	—	—
	第二類	LH	LH	LH
三拍形容詞	第一類	HLL	HLL	HLL
	第二類	HLL	LHL	HHL
四拍形容詞		—	HLLL	—

6. 貞光町端山における下降式の有無

先行研究で見た通り、山城町などの第1・3類のアクセントは HHH>HHL>LHL の変化の過渡期にあり、この変化をもたらしたのは讃岐式アクセント特有のものである下降式の影響を受けていると考えられる。山城町に下降式があると判断する以上、貞光町端山を筆頭に似通ったアクセント体系を持つ地域（池田町出合、一字村、半田町八千代）にも下降式が存在する可能性がある。話者（ID：1）から「貞光町貞光では尻上がりになるものが、端山では尻下がりになる」との省内も得た。貞光町端山に下降式がある可能性は極めて高い。今後の課題として、音響音声学的分析を行う必要がある。

7. おわりに

音調型とアクセント体系については表8の通りである。

<表8：貞光町端山の音調型とアクセント体系>

	1拍	2拍	3拍	4拍	5拍	6拍
0	○	○○	○○○	○○○○	○○○○○	○○○○○○
1	○」 ⁶	○」○	○」○○	○」○○○	○」○○○○	○」○○○○○
2		○○」	○○」○	○○」○○	○○」○○○	○○」○○○○
3				○○○」○	○○○」○○	○○○」○○○
4					○○○○」○	○○○○」○○
5						○○○○○」○

貞光町端山のアクセントについて音韻論的解釈を行う前に、貞光町貞光と一字村について見ておきたい。貞光町貞光は村田（2010a、2010b）によると讃岐式アクセントであり、上昇式と非上昇式（名称は上野・1987に拠る）の2式が存在し、核の位置によって弁別される。また、一字村は山城谷式アクセントであり、式の対立がなく、核の有無と位置によってのみ弁別される。この点においては上野（1987）及び石田・岸江（2001）のいうように東京式的である。さて、この二つのアクセントが接触して生まれた貞光町端山のアクセントについて、音韻論的解釈を試みたい。貞光町端山は境界地帯であり、多少の浮動がある。たとえばID：4のアクセントを見てみると式の対立が存在し、貞光町貞光的である。しかしID：1～3のアクセントを見てみると、式の対立がなく、核の有無と位置だけで弁別さ

⁶ 」は下がり目を意味する。

れている。つまり、音韻論的には、「車」などの単語は二拍目に核があれば他がどうであろうと許容され、語頭が高かろうが低かろうが関係ないという特性を持つ。これが貞光町端山のアクセントである。

貞光町端山のアクセントは山城谷式アクセントであり、森(1958)が指摘したように二拍名詞の統合状況は3(1・3・5/2/4)である。但し、第5類は表面上統合されているように見えるだけで、その振る舞いは第1・3類とは異なる。

第1・3類はゆれ、第5類がゆれない理由について言語地理学的に解釈が可能である。北に貞光町貞光(讃岐式アクセント)があり、南に一字村(山城谷式アクセント)があるという地理的特徴から言語接触を起し、両アクセントの音調で異なる部分、つまり第1・3類がゆれているということが今回の調査結果から分かった。第5類は両アクセントで同じ音調であるため、安定している。つまり、端山の地理的特徴が、ゆれの激しいアクセントを生み出していたのである。

更に、貞光町端山には下降式音調が存在している可能性がある。また、そうすると似通ったアクセント体系を持つ地域(山城町、池田町出合、一字村、半田町八千代)にも同じように下降式が存在している可能性が高い。

今回は貞光町端山のアクセント体系・音調を報告することとどめたが、県下には同種のアクセント体系を有する地域が存在する。それは、県最西端の山間部にあたる山城町(山城谷式アクセントの名の由来となった地域である)、池田町出合地域、半田町八千代、一字村である。貞光町端山とこれらの地域にどのような相違があるのか、それを比較・解明することは徳島県西部に存在する讃岐式アクセントがそのような経緯を経て現在の変種を生んだかを解明する手がかりとなろう。

まずは貞光町端山以外の地域のアクセントを報告することが急務であり、更に地域間の比較をする必要があると考えている。今後の課題としてじっくり解明していきたい。

【参考文献】

- 秋永一枝、上野和昭、坂本清恵、佐藤栄作、鈴木豊編(1998)『日本語アクセント史総合資料研究篇』東京堂出版
- 生田早苗(1951)「近畿アクセント圏辺境地区の諸アクセントについて」『国語アクセント論叢』法政大学出版局
- 石田祐子・岸江信介(2001)「徳島県諸方言アクセントについて」『言語文化研究』8

徳島大学

- 上野善道 (1987) 「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布 (2)」
『日本学士院紀要』42-1
- 上野和昭・仙波光明・森重幸 (1991) 「徳島県三好郡山城谷アクセントの動向——
二拍名詞を中心に——」『徳島大学国語国文学』4、徳島大学
- 上野和昭・森重幸 (1992) 「徳島県出合アクセントについて」『徳島大学総合科学部紀要
人文・芸術研究篇』5、徳島大学
- 上野和昭編 (1997) 『日本のことばシリーズ3 6 徳島県のことば』 明治書院
- 奥村三雄 (1990) 『方言国語史研究』東京堂出版
- 金田一春彦 (1947) 「語調変化の法則の探究」『東洋語研究』3
- 金田一春彦 (1974) : 『国語アクセントの史的研究原理と法則』 塙書房
- 坂本清恵・秋永一枝・上野和昭・佐藤栄作・鈴木豊編 (1998) 『『早稲田語類』
「金田一語類」対照資料』 アクセント史資料研究会
- 佐藤栄作編 (1989) 『アクセント史関係方言録音資料』 アクセント史資料索引別冊
アクセント史資料研究会
- 仙波光明・村田真実 (2011) 「つるぎ町一字の方言」『阿波学会紀要』第57号
阿波学会
- 玉井節子 (1965) 「香川県のアクセント」『国語研究』第20号
- 福良真依子・村田真実 (2008) 「徳島県西部・香川県西部方言のアクセント」
『徳島・香川両県西部のことば』徳島大学国語学研究室
- 村田真実 (2010a) 修士論文『吉野川流域のアクセント—京阪式アクセントと
讃岐式アクセントの境界—』徳島大学大学院人間・自然環境研究科
- 村田真実 (2010b) 「徳島県吉野川流域のアクセント—京阪式アクセントと
讃岐式アクセントの境界—」『日本方言研究会研究発表会発表原稿集』第91回、
日本方言研究会
- 森重幸 (1958) 「徳島県のアクセント概観」『国文論叢 (神戸大)』(7)、
神戸大学文学部国語国文学会
- 大和シゲミ (1996) 発表資料「徳島県出合アクセントにおける無核語の2種類」、
第35回音声言語研究会
- 山名邦男 (1956) 「徳島県下の音調」『兵庫方言1』兵庫県方言学会

【謝辞】

今回調査を行うにあたって、つるぎ町教育委員会教育長様のご助力を賜りましたこと、ここに御礼申し上げます。教育長様は端山の方言について詳しく書かれた書物と地図をご提示下さり、話者として相応しい方を紹介して下さいました。また、話者を務めて下さった古城芳明様、宮久貞広様、藤本盛様、松浦義人様にも篤く御礼申し上げます。ありがとうございました。特に、松浦様からはご自身と上柿源内先生が出版された『阿波貞光町の息吹』をお恵み頂きました。重ねて御礼申し上げます。